

ミャンマー出身の人権活動家・作家・外科医 マ・ティーダ (Ma Thida) 氏を招へい、講演会を開催します

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、日本と交流する機会が限られているアジア各国から、オピニオンリーダーである文化人や知識人を招へいし、日本への理解促進や日本における人的なネットワーク構築につなげていくプログラム「アジア・文化人招へいプログラム」を、毎年実施しています。

この度、ミャンマーで外科医として医療に従事しながら作家として言論活動を続け、社会問題に切り込んで発信してきた人権活動家のマ・ティーダ氏を、11月30日（木）から12月9日（土）の日程で招へいし、12月4日（月）に上智大学で「良心の囚人―独房から心を解き放つ」と題した講演会を開催いたします。



■招へいプログラム 概要

- 【日 程】 2017年11月30日（木）～12月9日（土） 東京、京都、富士山などを訪問予定
【講演会】 12月4日（月）15:15～17:00「良心の囚人―独房から心を解き放つ」
（於：上智大学2号館1702国際会議場）

ミャンマーは、50年余りに渡って続いた軍事政権から、2011年の民政移管と、その後の政権交代を経て、大きな変動の中にあります。この間、言論人として社会的・文化的発言を通じて世論に影響を与えてきたマ・ティーダ氏をお招きし、1993年から6年近くにわたる投獄体験を通じて、独房という知性も精神も無きものにされてしまう環境の中で、自身がいかにして心を解き放ち、肉体的にも精神的にも自由を獲得したのかを語っていただきます。

国際交流基金アジアセンターWeb ページ：<http://jfap.jp/culture/events/e-ma-thida-lecture/>

■招へい者 略歴

マ・ティーダ (Ma Thida) 氏：人権活動家、作家、外科医

1993年に「公共の安寧の侵害、非合法結社との接触、違法文献の配布」により懲役20年を言い渡され、6年近く獄中にあり、そのほとんどの期間を独房で過ごした。処女作は、1999年の『The Sunflower』で、当時、国外での出版は禁じられていたため、ミャンマー国内でのみ発表された。2012年に発表した『The Roadmap』は、1988年から2009年までのミャンマーでの政治的な史実に基づいて描かれている。ミャンマー語で発表された彼女の半生の回想録『Sanchaung, Insein, Harvard [幼少期、投獄期、米国留学期]』は、2016年に英語に翻訳され『Prisoner of Conscience: My Steps Through Insein』として出版されている。

※マ・ティーダ氏は滞在中、山梨県立文学館の視察の他、日本の文学関係者などとの交流を予定しています。

以上